2023年度活動報告書　場所・感覚・メディア

概要
ーーある場所を訪れ、感じ、考え、テキスト、写真、映像、音響によって変換し、表し、語り合う。それらが重なり混じり合う空間の中でまた「場所」が生まれ、わたしたちの「感覚」も 変容していく。

本プロジェクトでは、センサリー・メディアとしての映像、音響表現による「場所」の表象を多角的に捉え直し、あらたな芸術表現の可能性を探っている。アート、映像、音響、人類学、思想…様々な領域にまたがる研究者、制作者をゲストに迎えレクチャーやワークショップ、展覧会を開催している。さらに実践として様々な場所を訪れ、フィールドワークを重ね、作品制作を行いながら、変容していく私たちの「場所の感覚」について議論をおこなっている。

（2023年度メンバー）
担当教員：前林明次（主）・小林孝浩（副）

参加学生：浅井 睦（M1）・猪崎康生（M1）・松井美緒（M1）・石塚 隆（M2)・後藤朋美（M2）・新里尚平（M2）・Daphne Xanthopoulou（リンツ交換留学生）

（1）文献、映画、映像・音響表現研究

ティモシー・モートンのキー概念である「書くことにおける自然」「とりまくもの」「エコミメーシス」「ダークエコロジー」等を手がかりとして映像、音響、映画等の芸術表現を鑑賞し、批評と議論をおこなった。自然と文化の二項対立でなく「ヒトの自然」「境界のあいまいさ」「アンビエンス」、人類学的見地から「サウンドスケープ批判」「大気と人間」、認知や認識の構造と社会構造に対する問題意識から「知覚と表象」「シミュラークル」を論点として、レクチャーとディスカッションをおこなった。

文献研究・作品研究
-『自然なきエコロジー』　ティモシー・モートン
-『生きていること』　ティム・インゴルド
-『切り閉じる技術- ARAKAWA+GINSと世界原理』　稲垣 諭
-『ユーザー・イリュージョン』　トールノーレット・ランダーシュ
-『トポグラフィとサウンドスケープ』　佐藤守弘、前林明次
-『再魔術化するアート』　中島 智
-《I am sitting in a room》　アルヴィン・ルシエ
-《4分33秒》　ジョン・ケージ
-『オランダの光』　監督：ピーター=リム・デ・クローン
-《Thursday Afternoon》《Music for Airports》　ブライアン・イーノ
-《Cassettes 100》《Ugnayan - Music for 20 ratio station》　ホセ・マセダ
-『コングレス未来学会議』　監督：アリ・フォルマン（原作：スタニスワフ・レム）
-『惑星ソラリス』　監督：アンドレイ・タルコフスキー（原作：スタニスワフ・レム）

（２）金生山でのフィールドワーク（定点観測として）

石灰岩の掘削が進み、急速にその姿を変えつつある金生山を毎年、定点観測として訪れている。

金生山で採掘される石灰岩はコンクリート材料として社会の物質的基盤となると同時に、そこで採掘される化石は地球環境の変遷に関する貴重な資料となっている。さらに、明星輪寺の内部に祀られる石灰質の巨岩は信仰の対象として長く、人々の生活を支えてきた。「モノ」としての石灰岩は、時代や人々との関係性の中、多元的な様相をあらわし続けている。

＊西濃の虚空蔵信仰の中心となる明星輪寺のある金生山は、大垣市街近郊にあり、古くから鉄鉱石や大理石、石灰を産出してきた。寺に残る算額や境内に棲息する陸貝やヒメボタルや隣接する化石館は地球環境の変遷に関する貴重な資料を提供する場としても注目されている。はメンバー各々が場所とのやりとりを始めた最初の地点でもあった。

（３）農作業体験

実際に「土に触れる体験」を目標にフィールドワークを実施した。小林孝浩先生の農地を訪れ、ヤーコン畑の草刈り作業、ミニトマトの収穫を行い、ソーラーパネルやDIYによる農機具、焙煎器具等を見学した。

（4）「養老天命反転地」での体験授業、荒川修作＋マドリン・ギンズ思想の考察

「音が比較されるべきは、視覚ではなく光である。」ー ティム・インゴルドが著書『生きていること』の中でサウンドスケープ批判として提起した問題を、哲学者、稲垣諭の『切り閉じる技術―ARAKAWA+GINSと世界原理』で取り上げられた「養老天命反転地」の思想、「バイオスクリーブ」の概念と結び合わせながら議論をおこなった。ここではプロジェクトメンバー各々の制作との関連、あるいは様々なアート表現との関連についても考察した。

（5）講義「シンギュラリティ、欲望と技術、未来から現在を見る」（PJ副担当：小林孝浩）

現代において急速に発展していくメディア環境、（医療）技術などの進歩を俯瞰しつつ、そのような大きな枠組みにおいて、「場所・感覚・メディア」と関連する諸問題について触れ、考察した。

以下、情報共有と問題提起

- 成長の限界　1972年、ローマクラブがMITに委託し今後をシミュレーション
- 2030年頃から経済破綻、人口減少
- 参考文献の紹介　「2052」(2013年)　https://www.amazon.co.jp/dp/4822249417
- 気候変動、農業、新エネルギー　と　生存　の問題
- 情報テクノロジーの進化は毎年2倍、10年で千倍 (コストパフォーマンス、速度、容量、帯域など)
- 人間の長所と機械の長所とを合体させることができるようになる
- 脳の限界(速度、容量)を際限なく増加させられる
- ナノテクノロジー、量子コンピュータの実現化
- 神経系の内部からVRを作り出し体験を大幅に広げる(現実と区別つかない)
- フォグレット、他者感情理解、共感の再設計
- 欲望✖技術の駆動力
- ヒトは技術を使いこなせるか？　倫理性の問題

（6）講義「アート、都市への介入、知覚への介入」（PJ主担当：前林明次）

- 「スペクタクル、シミュラークル、シミュレーション」 ギー・ドゥボールの思想について
- 「都市への介入」、ゴードン マッタ＝クラーク、ローリー・アンダーソン、Sonic Interface（前林）
- 「知覚への介入」、「光と音」について、ティム・インゴルドのサウンドスケープ批判、トール・ノーレットランダーシュ「ユーザー・インリュージョン」
- 論考「再魔術化するアート」 中島 智
- 「場所をつくる旅」—場所の表象、同位性の問題

（7）フィールドワーク「春日山、栃ノ木」アンビソニック録音・再生実験

映像と音響による場所の表象と再現をテーマに春日山を訪れ、プロジェクトメンバー各自が映像記録、音響記録を行い、それらをギャラリーにて再現する実験をおこなった。実験ではアンビソニック方式での録音やバイノーラル録音をIAMASギャラリーにおいて複数のスピーカー、あるいはヘッドフォンで再生し比較した。

（7）「《Sonic Interface》 @柳ヶ瀬」開催

「知覚と技術による場所体験の変容」「都市、市街とメディアアート」をテーマに作品《Sonic Interface》の展示を岐阜市・柳ヶ瀬において12/1から12/3の三日間実施した。期間中50名程度の参加者が訪れ体験した。展示期間、展示後の授業において、ギー・ドゥボール「スペクタクルの社会」とシチュアシオニストの活動、その影響を受けたゴードン・マッタ＝クラーク、ローリー・アンダーソンの制作活動を参照しながら、《Sonic Interface》等のヨーロッパにおけるメディアアートの文脈について四方幸子さんの作品紹介文を引用しつつ理解を深めた。

（８）学生発表ーー本プロジェクトと関わりのある今後の研究テーマについて

今年度最後の授業において、「場所・感覚・メディア」プロジェクトのM1履修学生（３名）によるまとめ＋今後の研究テーマ（予定）に関連する発表と講評を実施した。

「非人間的主体としての虫と接触のイメージについて」　猪崎康生

「Share of Ambient-社会生活を行う上で会得する後天的認知力を活用した表現可能性の研究」　浅井睦

「ノスタルジックな不気味さの探求」　松井美緒